

破壊と救済：ベンの詩にみる自我崩壊と救済的詩的形象(1)

日中，鎮朗

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

92

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004849>

破壊と救済

——ベンの詩にみる自我崩壊と救済的詩的形象——(一)

日 中 鎮 朗

一 序——本論の意図

法則や概念で世界を把握しようとし、世界やその事象を計量可能と判断した現代文明の淵源であり、同時に受容器でもある自我・脳(脳髄)・意識に対する憎悪、敵意、苦惱が一九一〇年代初頭に開始されたベンの詩作活動のテーマであったし、またそれは、ほぼ生涯続いた中心的主題のひとつでもあった。本論ではこのテーマがどのように現われ、またどのような形象の下に転化、克服されてゆくかを詩を中心に考察してゆく。その過程で浮かびあがるベンの思考の特性に検討を加え、限界を明らかにする批判的検証も本論の目的とする。

二 現実崩壊・自我崩壊

(1) 『現代の自我』を中心として

現実の崩壊・自我の崩壊・脳髄批判は『モルグ』執筆時に対するベンの回想(『二重生活』(1911))や第一次大

戦で軍医中尉としてブリュッセルに赴いた時代にその始まりを見出すが、詩の形式としては医師の視点から即物的に観察された肉体の詩、即ち、攻撃的（＝加虐的）、露悪的（＝被虐的）詩語、嘲罵に満ちた語を多用した詩、いわゆるショック抒情詩という形式をまずはとる。続いて一九二〇年代後半の《形式》の消滅が主題となる時代を経て、ベン¹の詩は一九三〇年代以降の形態と表現、技巧と鍛練への信仰告白へと変化してゆく²と概括される。

この脳髓に対する苦悩のテーマをヴェラスホフは次のように要約している。

「脳髓の苦悶、意識という苦痛から逃れる救いを見出したいという望み、前・合理的、古代的存在状況への憧れ、動かされてあること、流れ去ってゆくこと、自我の溶解、万有との一体感情、これらがとりわけベン¹の抒情詩の主たるモチーフである。」

我々はこれを自我崩壊が集約的に扱われている講演『現代の自我』（一九二〇年）を概観することによって時代との関係をも含めてより詳しく検証してゆく。

現代は「現実的なものと認識の世紀」（M. 513-4）、即ち、法則や因果律を指導原理とした機械主義的、物質主義的世界観と功利主義、効率と享樂的生活の追求が基調であると定義される。平均的人間＝小市民的思考のなかで創造や本来的精神は失われ、創造に到るために必要な《感情》は均質化されてしまい、苦痛——「苦痛とは市民的理性^{ラティヤ}という下水灌漑農場を一掃し、深く壊滅させ、破壊しつつ、宇宙に対して自らに新しく刻印させるカオスなのである」（M. 579）——は回避される。こうして表現主義的な破壊衝動とともに終末論的論調——バビロンやシロアムの塔が比喻として使用される——のなかで、破局^{カタルシス}が予告される。「体系から破局へ」（M. 570）という呼びかけは破壊的ニュアンスを持ち、「人類全体の狂想詩」（M. 579）という表現は諦観的、傍観的ニュアンスを持つ。そしてここにまさに現実世界に対するベン¹の二重のスタンスが既に露呈している。

即ち、現実世界を破壊し、変革してゆこうとする方向と、現実世界から距離をとり、或いはこれを捨て去り、想像世界を一方的に構成してゆく方向である。詩作品においては前者は世界・人間存在や人間の尊厳に対する破壊的、攻撃的侮蔑的言語となって現われ、後者は遠方、南方、海、青、幸福、神話といった形象として登場する。重要な

ことは想像世界がベンにとって唯一の現実世界となったとき、その想像＝現実が容易に実際の現実に入り込まれてゆくということだ。そしてこれは一般化して言えば前者が破壊されるべき否定的側面、後者が打ち立てられ、或いは取り戻されるべき肯定的側面という単純な二項対立からベンの世界概念が構成されていることにその大きな原因が求められる。

ブッデベルクは二重性がベンの思考の照準点であることを次のように説明する。

「その心理構造からあらゆる統合の敵、統一に関するあらゆる思考の敵であるベンは、レンネをこの二重路線と二重軌道のひとつへと形成する。この二重性がベンの認識を決定し、彼の全作品を貫いている。彼は繰り返しその否定性において始めるが、それはその否定性が二重性の形でいけば並列できるときなのである。つまり、このようにしてベンは照準点を獲得するのである。」

ここでの否定性とはベンが批判する対象であるが、『現代の自我』においては既に述べた、(1)功利主義、実証主義、理性、因果分析、法則、(2)効率と享楽を追求する平均的市民性、(3)感情の均質化、という系に対し、(1)カオス、非合理(「前・合理」、精神(「構成的精神」、(2)運命・苦痛・上昇エネルギー、(3)陶醉(ディオニソス的形象)、という系の対応が明確に看取される。その後半部に登場し、後述するように詩の中心的形象となる南方、夢、はるかな遠さや自由は(1)に、「沸騰的感情」は(3)に対応する。

我々がこうした二項対立の各項をさらに数多く挙げてゆくことは可能であるが、問題はこれが一見してそう思われる正・反・合という弁証法的思考運動、或いは発展化、ダイナミックな思考の動きを示したり、何らかの発見が為されるのではなく、ブッデベルクの言うようにベンが否定性から始めることである。つまりまず、現代に対する不満、批判があり、それが否定的事項への列挙、攻撃となり、それに対して破壊的、治療的、救済的に作用する肯定的なものが対置されるのであって、実際にはこの肯定的要素は絶対的なものとして予めベンの内部に存在しているのである。ベンが統合・統一の敵であるのはいわば「反」として提出された要素が予め「合」であることに帰因する。ベンの芸術的創造におけるこの意味は後述するが、ベンが終生ひきずった彼の基本概念のひとつ、即ちヨハ

ンセンの近代遺伝学を土台にした人間——結局は文化になるのだが——の二形態、つまり個の内に実際に発現する全ての性質の総和としての〈表現型〉と個の定まった系統から可能な、潜在的で作動しうるあらゆる表現型の総和としての〈遺伝子型〉という分類も、それが一見して持つ中立性や客観性は実は存在せず、また何かをめざしての分類でもない。つまり、〈表現型〉が表面的、表層的形象、即ち、平均的人間の発現型を担うのに対し、〈遺伝子型〉は「その背後にあり、はるかに広範な遺伝子型」(A. 652)という定義が示すようにこの分類には予め価値観が付与されており、ベンは〈遺伝子型〉を称揚し、絶対的価値基準として設定している。これを〈個〉と〈種〉に対応させてみても〈種〉の優位を定理として持ち出したにすぎない。従ってこの二項対立は止揚は勿論、変化もせず、ベンの思考は静止し、硬直化しているといえる。第三章以降で我々の抽出する種々の形象も常にこうした価値判断に規制されていることに注意しておく必要がある。

こうした観点から見たとき、世界の歴史と関係づけながら述べられる自我の変遷、即ち、個的主体という独立したものの感情、換言すれば「主体的生の感情」(M. 580)から意識＝脳髓へ、「純粹に現象的世界の担い手という意味での意識」(M. 580)への変化もこの固定的二項対立の図式内にあることがわかる。

例えば詩「肉」を見てみよう。

「だれに未来がわかるというんだ／脳髓は迷路さ。／…／(自分の脳髓をつかんでおろす)／おれは自分の思考中
 枢に唾吐いてやる。／

(……)

脳味噌も尻も、腐れようはまったく同じだ／…／頭をずたずたに裂いてやる　脳髓をひっぱり出せ——　ちっば
 けな塊だ！／」

《Fleisch》34, 37 生野幸吉訳

詩全体を通して腐肉＝屍体が激しく罵り合い、自嘲し、嘲笑し合うという状況設定のなかで、脳髓＝意識＝思考が加虐的、罵倒的言語で攻撃されるが、その罵倒の背後に自我や世界に関する本来的状況が予め想定されていることが、この極めて露悪的詩——死体は相互に「下種女」、「鞭を当てる」、「かたわ者をめえめえ鳴かせ」、「老いぼれのできそくないの町人の死骸」、「からだに自分で穴を掘るがいいんだ!」、「ふぬけども! 下種犬! 賤民ども!」と呼び交し、自己に関しても脳味噌が脇にぶちこまれ、右の心房が肛門から顔を出し、自分の腋窩の糞を洗い流してほしいと言う——にも突然の変調を以って暗示的に記述されている。

「思え、イタカを。神殿は海から海へ／大理石のおのきを吹きつたえた。／

(……)

…おお夢よ——色はなやかに、原始的に、深みに溶けて、脊髄に里戻りして—— (34, 35)

こうして神殿(ギリシア的古代)、海、夢、原始性、深みという肯定的要素を脳髓批判の背後に我々は常に読んていかねばならないのである。個々の形象の意味づけ、位置づけは後述するが、屍体になってもなお残る意識＝脳髓への攻撃は實際は常にベンの肯定的詩的形象に對置されたものとしての機能を担い続けるのである。ベンの精神世界を象徴するこの表象は無媒介に表現として現われる。感覚と精神が一体化したこの形象は實際、『現代の自我』の末尾に近い後半部に殆ど詩的高揚を以てうたわれるが、それを見る前に意識＝脳髓＝自我の集中、肥大化が現実崩壊・自我崩壊となってベンの現代批判の出発点を見えておこう。

「主体的生の感情」を担う本来的自我は「全ての外的世界を内的体験として耐えられたものだ」という主観主義(M. 580-581)を自らのうちに形成しながら発展してゆく、即ち、外的世界の内にありつつ、外的世界を内面化してゆくという世界との有機的關係を形成しているのに対し、現実原則には従うが可能態として存在するもの、世界の背後に、或いは深層に存在するものには関心を示さない実証主義の延長上にある〈意識としての自我〉はそれ自

身独立して存在し、外的世界を体験したものとしては担うが、体験しうるものとしては担わないものと解釈することが出来る。こうして自我は「最初であり最後、自分自身の筈」、「あらゆる疑に入りこんだ意識、実験によって真空中にされたア・プリオリ」(M. 58)であることにより、外的世界との有機的関係を喪失し、いわゆる人間不在の下で出来事も生起せず、現代は「ただ自我のみがいつも存在する」(M. 58)、「ただ意識のみが永遠に無意味に、永遠に苦悩に襲われて存在する」(M. 58)という状況になる。感情を失い、意識と化したこうした自我の肥大化がベンの批判する「脳髓(大脳)主義」である。このとき、現実崩壊が始まる。

(2) 『医師レンネ』における告白

現実意識の独自の混乱から現実との完全な関係の喪失に到るいわゆる『医師レンネ』小説群の成立、つまり医師レンネ像(＝ベン)の成立についてベンは自伝『二重生活』において「…この現実には存在していないのではないかという夢幻状態が私を去らなかつた」(D. 1896)という現実喪失感から始める。一九一五―六年のブリュッセルで生まれた、ベンの自己投影像である医師レンネは「…諸事象の真空状態であり、現実を耐えることができず、また現実をもはや捉えることができなかった」人間であった。現実崩壊は外界の正確な把握、受容、対峙が可能であった自我の崩壊とパラレルに進行し、脳髓化、意識化した自我の拡大に帰因するのである。

オスカー・ザールベルクは一九一〇年代のベンの初期の主題を「自我の崩壊」(Chazertal)とみて、「一九一三年から一九一七年の間のベンの作品では脳髓から、額から、自我から、意識から解放されようという願いが支配している」⁽⁵⁾と述べる。

ベンの脳髓・意識からの解放は外界の捨象と内面への集中、没入の形で行なわれた。

「私は一種の内的集中を始めた。秘密の領域を活発にさせた。すると個人的なものは沈み去り、原・層が持ち上がってきた、陶醉し、形象に溢れ、興奮して。」(D. 1896)

後述する海、青、遠さ、南方の形象はこの原・層に存在するわけだが、この陶醉的内的集中は逆に自ら外界を排

除する道を歩ませることになる。

現実崩壊は存在への懷疑、存在の否定や喪失感という存在論的地平と世界と自己との確固たる関係が見失われるという関係論的地平の二つの面を同時に持つ。一九一五年成立の『脳』ではレンネは最初、現実をできるだけ記述することで現実の崩壊に抵抗しているが現実喪失は止めようもない。(「これからはできるだけ多くのことを書きとめるようにしよう。全てがこんなふうに流れ落ちてしまわないように。…そして全ては沈みこんでしまったのだ」(G. 1185))。レンネは山頂にある病院で医長の代理を務めるのだが、この外界と隔絶した閉鎖空間、病院という非日常空間は自己転換、自己回復のマジナル空間として位置づけられ、機能する。ここではベンの初期詩篇と同様に現実の崩壊はまず肉体の崩壊として現れる。つまり常に悪意を以て見られる肉体、感情や意志を持たない肉塊として存在する病人の肉体、死を内包する肉体(「前面には人工的開口部。背面は床すれ。その間に少しぶよぶよした肉」(G. 1186))として現れ、それが世界に対する全体的喪失感の顕示部分となる。即ち、肉体、殊に屍体へのベンの異様に激越な攻撃は現実崩壊への彼の抵抗の裏返しであり、またその抵抗の敗北における自己への苛責なのだとりあえずはいえよう。

次にこの肉体の崩壊は世界内での自己の位置の喪失に繋がり、ベン＝レンネは空しく自己の定点を探す。

「確かにかつては僕は存在していた。疑いもなく、集中して。僕はどこへ行ってしまったのか。今、僕はどこにいるのだろっ。」(G. 1188)

以上のような存在論と関係論の二つの地平での現実崩壊はやがて自己を内包する世界を制御できないという形に進行する。レンネは自分と異なる法則、無関係の運命に従って生きる人間たちにまず疎遠を感じる。次第にそれがあらゆる事物、空間に及ぶ。

「僕はもはやどんな事物とも向き合っていない。つまり、僕はもはや空間を支配する力を持っていないのだ…」(G. 1190)

『征服』において何ヶ月も続く「喪失感と絶えざる追放感」(E. 1192)からの脱却を、自我の内部で、つまり精

神的に街を「占領」することによって試みるが、結局は失敗する。この最終的な失敗を経て前述の一九五〇年に刊行された自伝『二重生活』でのベンの回想に繋ってゆくのだ。まとめて言えば、「中心が崩壊し」(D. 1192)、レンネは外界との諸関連を見失い、把握不能となり、諸事象の真空状態が出来する。回復への抵抗のあらゆる試みが失敗したときレンネ・ベンは自己内面への集中の道をとるが、それは外界の放棄であり、神話に身を委ねることを意味した。つまりレンネは「内的存在が持続的に破れた者であり、人間と世界との間の深く果てしない、神話の古さをもつ乖離という体験に直面し、無条件に神話とその形象を信じた」(D. 1196)のであった。

原一層を浮上させることは世界との乖離を意味した。ベンの神話、詩的形象はその成立事情から既に現実世界に対応物を持たない、つまり根を持たないものだったのである。にも拘らずそれは現実世界を徹底的に非難すること存在点を持つため——言うまでもなく現実批判は自己が本来抱えている価値観や世界観と現実世界との齟齬に由来するから、価値観(世界観)・ベンの詩的形象は予め存在していることになる。従って実質的にベンは詩的形象を現実世界に結びつけられなかった(それ故、ナチスに結びついた)ことがベンの創作上の特徴なのだ——現実世界の新しい構築の試みであるかのようにカムフラージュされてしまう。従って現実世界への対抗世界として成立した夢、南方、遠さ、海(島)などの位置に——ナチズム以降のベンがそうしたように——〈表現〉が入っても実質的には何ら変わらないのはそうした理由による。

「皮質」・脳髓。世界の皮質の終焉。市民的世界、資本主義的世界の終焉。……これは西欧の存在の実体的危機から生じたのである。」(D. 1908)

脳髓化という同じ危機的状況下の対処にベンは新しく〈表現〉を持ち出す。表現は保持され、闘い取らねばならぬものであり、情緒的な人間、概念への渴望、ビーダーマイヤー的狭さ、真理——真理は深さ、遠さの形象であり、後出の表面性と対置されるが、この時点で遠方、南方の詩的形象は全く否定された——、ヒューマニズムを否定し、新しい世界、鍛練された表面性と形式を内包した「表現の世界」が称揚される(D. 1908-1910)。パメーレン劇、即ち、認識論的戯曲『測量主任』(一九二六年)についてベンは「生きるべく世界はもはやなく、感じとる

べき現実もはやなく、信ずるべき認識もはやなくなった」(D. 1808)。パマーレンが現実崩壊、自我崩壊と闘うが失敗に帰すという筋を述べ、戦後の視点から次のように発展させる。

「形式的なものにおける人類学的救済、概念における地上的なものの純化を肯うこの根源的感情のなかに新しい時代、新しい必然性が始まる。パマーレンのなかにファウストの時代を越えた形式の世界、関係の世界が始まる、つまり表現の世界が始まるのだ。」(傍点ベン)(D. 1910)

形式の世界、表現の世界においてベンは敬愛したゲーテ＝ファウストの世界認識的立場を乗り越えようとした。以上のベンの内的変化を踏まえたうえで『現代の自我』の終結部における脳髓化に対する解決方法を見てみよう。

脳髓化した自我は神々を追放し、自らが冷静な神となる。これが自我の社会的自我への転向である。この神話を持たない神に対し、ベンは今や偉大な夜の時間、陶酔の、のがれる形式の時間だ」(M. 583)としてディオニソスをギリシア＝南方から呼び出し、「…あなた方は夢見るのだ」と語り出して次々と海、大地＝草原、星、夏、孤独、陶酔、冥府、運命、幸福、夢といった形象を紡ぎ出す。我々は次章で詩に現れたそれらの意味づけを試みるが、ここでは次のことだけを押えておこう。即ち、これらの形象は二重の領域に意味を持つ。ひとつは詩・文学創造の領域、もう一方は無意識の領域である。意識化＝脳髓化に対抗し、それを解決するものであるからこれらの形象が無意識を表象することは当然ともいえるが、それはまたベンのフロイトとユングへの関心と言及、またウーテッツ編集の『性格学年報』への言及、ベンの母校カイザー・ヴィルヘルム・アカデミーの先輩、フィルヒョー、ヘルムホルツ、ライデンなどの名を挙げていること、とりわけ『人格の構成』(一九三〇年)において自我の精神分析的解釈の意義を積極的に認めていることに証される。

本論ではこれらの形象に関しては主に詩の表現面からのアプローチを試みるが、『現代の自我』においてクロウズアップされ、且つ、詩として表現されない「自由」についてここで触れておく。

「精神は自由で創造を内に持っています。」(M. 576)、「あなた方は自己」を創造してよいのです、あなた方は自由なのです。」(M. 577)

この「自由」とは何か。それを理解するためにはこの自由が確保される場を考えてみる必要がある。偉大な夜の時間に陶酔へと移行し、忘却の象徴である罌粟の花を持ち、「あなた方は夢みるのです」(M. 588)と述べられるとき、この自由は陶酔や夢、忘却のなかでのみ保証される意識下の状況を示すことがわかるのである。陶酔や夢において抑圧から解放され、はじめて自由に創造活動が出来るわけである。ベンは一度、創造性のためにこの陶酔―自由を人工的に得ようとした。即ち、コカインの使用である。しかし、ベンはより巨大な陶酔、ディオニゾスの陶酔―自由の下でむしろ自我が生る感情表現になり、「自我のぞくつとくる幸福」(M. 588)が訪れることを知る。『現代の自我』ではナルシスにディオニゾスの姿が与えられ、大麻を燻し、純粹な酒の酩酊と孤独の作業を通して創造行為を行ない、〈現代の自我〉からの脱出が宣言される。いや、ステュクスの川に浸るナルシス(M. 589)の形象は脱出ではなく、本来の自我の再生であるということが出来る。

三 詩の諸形象

(1) 〈血―誕生〉と〈肉体―屍体〉

一九一〇年代の詩、とりわけ一九一七年に『アクツイオン詩集』第三巻として出版された全詩集『肉』に収められた詩集『モルグ』『息子たち、新詩集』、及び表現主義の雑誌『アクツイオン』『シュトルム』などに発表された詩について、誰もがまず目につく明白な特徴は医学用語を駆使した肉体(肉塊、屍体)の解剖学的な生々しい細部描写、肉体やそれが示す人間性^{ヒューマン・ナチュア}への軽蔑、嘲笑、罵倒、冒瀆、露出的エロス、過度の露悪性、激しい攻撃性(加虐性、自虐性)、破壊衝動である。

「かぶせろ、恐ろしい下半身に泥を、／戯画めいた裂けめ、毛叢、／胴体、腹下の顔、会陰、／暗やみではやくもおのれを予感する会陰の泥を／わたしの下半身に。

のどが鳴るまではちぎれるがいい！／葦のしげみをフェルトのようにもつれさせろ！／おまえらの根っこにくらいつけ！／

(……)

膝まずけ、犬よ！／揮発せよ！！／ずん胴、腹下の顔、会陰の部、／それをあいつの上に――」

《Noturno》402-403 生野幸吉訳

「舞踏会。娼婦どもの十字軍。梅毒のカドリユ／脳髓を産卵しろ、陰囊の情夫野郎！／この俺れの齒で、／引き裂かれ、噛みくだかれ／犬の脳味噌、男の、大の、小の脳髓――／それらの文章論さえも子宮を求めてカタカタしゃべる／

(……)

寄ってこい、呪われし者どもの軍勢よ／埋め込まれたおれの精液へ、ジャッカルのようにむらがれ――／誘い出して奪え、瀧し蜜、胎児の腐敗！／

おまえたち、厩ののたれ死、糞堆的眼球破裂／腐った膀胱、重売りの餓死／おまえたち壊疽の花盛り――運河の漁夫／陸へ鱗獲りに／水雲の睾丸を！ フィナーレだ！ 売女ども！ 天体の緑青！／紳士たちをチーズに変えちまえ！ 腫瘍を骨に吐き入れろ……」

《Ball》404)

詩「舞踏会」では会場の男女の欲情が主題となるが、それは愛としてではなく即物的性愛としてうたわれる。殊にベンエロスの詩では多くは娼婦として登場する女性への攻撃と蔑視が目立つ。それはすでに連作詩「深夜カフェー」においてそこに集う客たちへの罵声とともに女性蔑視は確立しており（女ども、／あまりに愚かな下種だ）《Nachtcate

「(370) 何でも女性は娼婦として捉えられている（唄）は「牝豚をうっとり興奮させる」》Nachtcafé IV《397》。ここで何故、女性・娼婦への攻撃が繰り返されるのかを考えることはベンの世界への新しいパースペクティヴを開く。それは誕生（出産）と深く関わる。即ち、精液を喰らうが何も生まないもの（胎児の腐敗）、つまり生殖につながらないエロスは退廃した性、不毛な性であり、その原因は性の脳髓化・意識化に求められ、結局、芸術的非生産性、非創造性と重ねられる。このエロス・誕生は血の形象へとつながる。ここでは詩「ノクターン」においてそれを確認しておこう。

「屠殺し、割れ、抱卵し、おまえらを肥厚させろ／陶醉がうまれようとする、――わが脳髓！ おお！ 自我よ！――／恥部を砕いて夜闇に押し流せ――／いま星と光の穹窿となり／まわりは暗く青い。――／

血の過出。恥部停止。地上の臍の緒を切られ。／（…）

性の解体。種属奉仕の／壊滅――／全裸にされ、脳髓のアフロディテ……泥砂の血――」

（『Noturno』 402-403 生野幸吉訳）

抱卵・血の過出という出産の觀念は「地上の臍の緒」といういわば縁語に繋ってゆくが、それは陶醉のうちに行なわれ、やがて脳髓・自我・意識を包み砕き、恥部を砕く。このとき星と青の形象が現れてくることに注意しよう。星と青は創造の源泉であるはるかな国の、今は失なわれた場所の表象なのである。

一見、死と破壊をうたいつつ、ベンの詩は生への、出生への苦痛に満ちた解放が常に潜められている。しかし此岸での死はそのまま彼岸の生であるという宗教的発想と違ってベンでは此岸の死は明確に腐敗に他ならず、彼岸には生そのものではなく生の源泉しか存在せず、生はあくまでも此岸でなされねばならないことが要求され、その苦

洩、アポリアがベンの詩表現における加虐と自虐を同時に生んだのである。

「僕を連れてってくれ、僕は沈みたいのだ／死なせておくれよ、僕を生んでくれ」

(『Nachtcafé』 386)

死、むしろ死んでいること(屍体)はベンの詩においては常態であり——それはまさに『死体公示所』や死後もなお脳髓だけが残る屍体の会話で埋められた詩「肉」の世界に他ならない——死を常態という位置に置いたのは死が現世との大仰な、人文主義的な別離という意味を帯びやすいのを避け、脳髓化した人間の死は腐肉化の現象にすぎないことを彼の出発点にしたいからだと考えられる。また、血は誕生と常に関わり、現代文明の領域にある意識・脳髓に対し、文明の対極にあり、創造性を孕む原始性、プリミティブなものの領域と結びつく。血の形象は詩集『肉』の殆ど全ての詩に現われる。『Der junge Hebel』では「死の血のなかで一世界の二つとつを」溶かすしかない(21)という世界に対する血の浄化力がうたわれ、それは一九四八年の『静学的詩篇』(『Statische Gedichte』)の中の詩、つまり失われた時代、失われた存在と創造の時空へ思いを馳せる『Verlorenes Ich』において「杯から飲む血が人々を清めていたとき」(216)には、求心的存在に安定し得た時代があったという過去への憧憬へと発展する。『Vor einem Kornfeld』では画題としての麦の花についての想像力がメルヘンや女性から苦難や血や死へと移行してゆく(「そこで血のどろどろの塊とメンスを思う」(380))というベンの関心の所在が明らかになっており、「ノクターン」の抱卵はここでは挫折した抱卵、つまり排卵・メンスという生殖のイメージとエロスのイメージのダブル・イメージに変化している。従って「深夜カフェ」の「たっぷり四リットルの血、そのうち三リットルは／腸で食い太ったのだ、そして四リットルめは／生殖器に満ちて張りつめる」(『Nachtcafé』 398)という描写は単なるエロスではなく、出生＝始まりという意味とイメージを——多くの場合そうだが、しかし必ずしも子宮・生殖器を通す必要はない——帯びたものと考えねばならない。この始まりは自己の破壊→再生の試

みへと通じてゆく。「おれはペストをはこぶ。おれは悪臭の巢だ」で始まり、「……発くらわせろ！ くそ！」で終わる破壊と罵倒が基調の詩「盗賊＝シラー」(《Räuber-Schiller》388 生野幸吉訳)においても従って、「流産した谷間ども」を埋葬し、娼婦の粘液から「おれの血」に漏れ入った悪疫のために汚れた自己をも破壊したい衝動にかられる焦燥があり(…アベルの血がそっくりと氾濫すればいいんだ)、カインによって流れたこの血はカインの悪や暴力に対して破壊ということ自体の正当性や魅力を認めたくえでさらにその血が氾濫することによってそうしたイデオロギー的次元を凌駕した何か巨大なもの、根源的なものの現出(誕生)と一新を期待しているのである。

《Ein Trupp hergelaufener Söhne schrie》においては出産に関わる血が形而上学的誕生と存在をも表象していることが明確に示される。即ち、「血に濡れてこの世に生まれて来たとき／私たちは今以上の存在だった」(393)というときの出生の血が「私は私自身の血が欲しい」(393)とうたわれるとき、この血への欲求は本来の自己への欲求を意味することになる。父と子の葛藤をテーマとしたこの詩は神父になってほしいという父の願望を拒絶した経緯の投影であるが、その内容上からも神＝父とキリストと一幼いころの血に力を得て(393)の本来性への回帰という二重の意味構造を持つ。第四節において親の祈りや心配が自分たちを小さく刻んだとして「息子であるというのは自分自身の血に嘲けられるということか／臆病な主よ、臆病な主よ」と叫び、宗教性への近接を感じさせるが、実際、戻るべき本来の絶対的な場があるというベンの基本的世界観は「絶対的な充実、排他性、精神の集中」という宗教性を持ち、一九二〇年代の抒情詩の代表例としてゴスマンが挙げるル・フォールの表現主義的な調子の「教会讃歌」について述べられたことが当てはまる。即ち、「人間存在の窮極の根底をもとめる不安な探究」は「おおいなる帰依」となり、「陶酔的であり、アンチテーゼ、高揚、平行によって特徴づけられ」具象的な形象の群のなかに抽象的な概念⁽¹⁰⁾があり、唯美的なものの彼岸に絶対性、信頼、幸福——ル・フォールの場合には宗教的現実、ベンにおいては創造のはるかな国——が存在するのである。

《Mutter》、《Karyatide》、《Englisches Café》、《Untergrundbahn》、そして《Nachcafé》の連作、前掲の《Fleisch》など血の表出は夥しいが、つづつ「おおえの血はとても美しい」(《Drohung》23)という表現は

美の倒錯の位相ではなく、こうした文脈の中で読まれねばならないことがわかる。ベンの詩の特徴としてこの血、出産が粘液と置換されて、死と生と出産が象徴的にうたわれる。

「おおわたしたちが、太古の太古の先祖おおむであればいいのに。／あたたかな沼地のなかのひと塊の粘液体。／死と生が、みもりと出産が／わたしたちの無言の液から滑り出ればいいのに。／

(《Gesänge》 25 生野幸吉訳)

「太古の太古の先祖ウルク・ウレン」から隔絶された「わたしたち」がその先祖に向けて出産されること、つまり現実世界における孤独な生と死を経て生み戻される願いが静かに悲しみ深くうたわれている。そしてここにも神が現われ、汚濁した現実から神へ視線が向けられる。

「わたしたちはこれほど悲しみ深い。疫病にくまなく罹った神々、／そうしてしかも神をしばしば思うのだ」
(25)

ベンの生涯と諸作品から考えるとき、ここで意味される神は実はキリストではなく、個人的、内的な神だと理解されねばならない。実際、この詩の次節ではベンの救済の形象が現われ、内的世界の中の私的な神であることを明らかにする。

「やわらかな入江。暗い森の夢。／肝木かんぼくの花の球ほどに大きく重い、星々。／豹は声もなく木々をくぐって跳ぶ。／すべては岸だ。永遠に海は呼ぶのだ。／」(25)

夢、星々、岸、海といった形象の具体的意味は後述するが、「悩み多」く、「悲しみ深い」孤絶した「わたしたち」が現実世界からの脱出を試み、海へと向かう。救済はそこに存在する。詩全体は前半に願望と現状認識、後半に決意と出発で構成されている。「すべては岸だ」と言われるとき、出発すべき時と場所はいたる処に存在し、また同時にそれははるかな場所の岸をも示す二重性によってベンの世界のまとまりと宇宙的自在さを獲得している。我々は幾つかの詩を例証として引用しつつ、ベンBenの詩、殊に一九三〇年代までの詩全般にわたる一般的特徴について触れてきた。これらのことを共通の理解としてベンBenの詩の認識の基礎に据えて、これから詩のこうした形象の意味と機能をベンの世界を構成しつつ、検討していこう。

(2) 《虐》の構造——『モルグ』を中心として——

死体公示所の十数体の屍体は検死医に解剖され、その視線に晒され、ますます裸になり、人間性を、人間が所有していた苦の尊厳を奪われてゆくように見えるが、ベンBenは現代ではそうした人間性は予め奪われている、つまり幻想にすぎないことを暴き、我々に突きつける。そのための表現的手段が攻撃性であり、内容的選択が屍体（肉塊、腐肉）であるが、人間の根源的なものへ向けられた視線はまたベンBenの意図を越えて彼の根源的部分をも逆照射してゆく。

第一詩、溺死した男の解剖をテーマとした「小さなアスター」ではその露呈した肉体の醜悪さや露悲的解剖の描写（「私が胸から始めて／皮膚の下を通して長いメスで／舌と口蓋を切り取った時」）『Kleine Aster』7. In: 『Morgue』の後でこの男の歯にリラ色のアスターの花を挟む行為にはロートレアモンの異種の邂逅の美は既になく、ヒューマニズムへの挑発と訣別の姿勢だけが見られる。死体の歯に挟まれたアスターは人間性を卑しめ、辱しめる。この侮蔑はゲーテの『Wandlers Nachtlied』6, 'Über allen Gipfeln/Ist Ruh./ (...) /Warte nur, balde/Ruhest du auch.' という句を皮肉的に対極に想定して響かせた「しずかに憩え／小さなアスターの花よ！」の句によって効果的に、かつ完璧なものになる。「憩え」と呼びかけた対象を人間（屍体）ではなく、アス

ターに置くことによって人間と物体（花）の關係にヒューマニズムの観点からは当然の如く付与されていた価値への疑問、再考が要請され、転倒が行なわれるのである。敬意を以て扱われるべき嚴肅な人間の死を冷静に、決定的に打ち砕くことによってベンはそうした観念をも打ち砕くのである。

第二詩「美しい青春」は屍体をビル運搬人の男から少女に、アスターを鼠の家族を変えただけでほぼ同一の構造を持つ。少女の口は鼠に喰い噬じられる。

「胸を開くと食道はとても孔だらけだ／横隔膜の下の方阿にととう／若い鼠の巣が見つかった／（…）／他の鼠は肝臓や腎臓を喰べて生き／冷たい血を飲み、そして／ここで美しい青春を生きたのだ」

（《Schöne Jugend》8）

少女の肉体の構造が医学的視線によって仮借なく分解され、タイトルの「美しい青春」が少女の青春ではなく鼠の青春であり、死に対する嘆慨も少女の死ではなく鼠の死に向けられていることが明らかにされるとき（その小さな妹鼠は死んでいた／（…）／そして彼らの死もまた美しくそして素早くやってきた）、読者は己れの内にひそむ既成観念の存在を否応なく発見させられ、気づかせられる。さらに読者にとって驚くべきことは、死体が鼠に喰い荒された事実よりも〈私〉がその事態に驚きを示さず、当然の如く受容している事実である。死体の齒にアスターの花を刺す行為を〈私〉が美しいと感じる——勿論、ベンはその行為自体は美しいどころか、侮蔑的であると読者が受けとめることを充分、承知している——点にベンの実世界に対する疑問の表出が看取され、死に対する感傷性に依拠した小市民的ヒューマニズムを拒絶し、それと隔絶した即物的、解剖的、細密的描写を読者に突きつけることによって彼は既成観念に保護されて生きる平均人間への挑戦と挑発をしている。

〈死体公示所^{モルブ}〉に運ばれた死体は言うまでもなく変死や引き取り手のない娼婦等の死体である。ここでは死はすでに人間に畏敬を喚起する正当性と過程を失っており、既に生起した所与の事実としての匿名の死体としてのみ存

在が与えられ、死体がかつて人間として持った個人的生の歴史は——ベンがナチス以降もこだわる人種と職業以外——全く顧慮されない。つまりここでは死は一九二八年に英国の女スパイ、エディット・ケイヴェルの射殺刑の際、軍医として立ち会ったベンが述べた言葉、「彼女は完全に、絶対的に現在、死んでいる」と同じように完全に絶対的である。この死にとって現実世界との関係は失なわれたものであり、また死が日常である死体公示所で働く〈私〉にとっても法則や概念が統べる現実世界はもはや存在していない。

これは当時のベンの生の状況を示していた。即ち、一九二二年、A・R・マイアー書店から『モルグ』を発表したベンにとっても現実世界は崩壊していたのである。『モルグ』執筆時のベンはモアビートの病院で解剖学講座をとっており、そのとき六つの詩のツィクルスが同時に立ち現われた。その状況の報告（『薄明の状態が終わったとき、私は虚ろで、飢え、眩暈がし、やつのことで巨大な崩壊から脱け出て身を起した』（D. 1611））は彼の創造の巨大な内的な闇を示すのみではなく、エルゼ・ラスカー・シュラーがベンに献詩した際に添えた次の言葉からも理解されるように、ベンの現実崩壊が死の日常化と深く関わっていることをも示している。

「彼は彼の病院の地下の穴倉に降りてゆき、死者を切り刻む。秘密を溜め込むのに満足を知らぬ男、彼は言う——死は死なのだ。」⁽¹¹⁾

しかも公刊直前に起きた母の死は、ベンの父との葛藤ゆえに母には一層深い愛情を抱えてきたベンには大きなショックであり（「若きベンの人生における決定的なショック」⁽¹²⁾）、これが彼の現実崩壊に拍車をかけたことは疑いを容れない。

現実が崩壊し、その崩壊した現実には代わるべき現実には未だ発見されず、本来の自我が崩壊し、脳髄化、意識化した自我だけがその存在を拡大する。ここで我々はベンの冷やかで醒めた描写・記述にこの皮肉な状況の反映を見ることが出来る。つまり脳髄化した自我への破壊・攻撃と（「小さなアスター」では解剖中の〈私〉の手に触れた花は〈脳髄〉に潜り込み、「ニグロの花嫁」では馬に蹴られて死んだニグロは額・脳に孔を開けられ、「レクイエム」では子宮から流れ出た嬰兒の死体は脳が潰れた死骸にすぎない）、怒り・嘆慨を冷静に記述・詩作する主体

自我は脳髓化した自我に他ならないという矛盾である。『モルグ』執筆時代を回想した『エピソードと抒情的自我』における「……生は沈黙と喪失の領域で揺れていた。私は存在が崩れ、自我が始まる辺縁で生きていた」(Bp. 1874)という記述は現実存在の崩壊と意識・脳髓化した自我の間で危機的な生を微妙なバランスをとりつつ生きるベンの姿を明確に示しているものである。

ヴァルター・レニツヒは現実崩壊を告白するレンネとベンと冷静にそれを記述するベンとのこの「明白で著しい矛盾」「必然的であると同時に決定的な矛盾」を認め、「この矛盾を認識してその中に踏み込んで始めて、ゴットフリート・ベンの正しい視^{パースペクティブ}点を得るのだ」と述べる。こうした観点から見た時、ベンにおける、死を常態的に扱うこと、人間性と人間の肉体(屍体)への破壊・攻撃的表現、性の形象化の意味の地平が開けてくる。

一般にサディズムの概念は破壊の対象を外に求めることと対象に苦痛を与える衝動に要約できる。しかし、ここにエロスが加わると破壊衝動の根源に結合衝動を見出すことができる。マリー・ボナバルトは次のように述べる。

「エロスの本質的アンビバランスはそれでもサディズムのなかに満足を見いだそうとする。愛の対象と結合したという、愛するものの永遠の、しかも実現不可能な欲求から生まれるこのアンビバランスは、この欲求のむなしく苦悩に満ちた緊張に終止符を打とうとして、対象の破壊を望むのである。」⁽¹⁴⁾

こうしてサディズムに積極的^{ポジティブ}、生産的なものの地平を見ることができ、さらに「死」という観点を導入すると——実際、ベンは実生活において毎日、死(屍体)を受け入れ続けていたのは既に述べたとおりである——サディズムと自己に向けられた救済の試みの関係が浮かびあがる。

エロスと攻撃本能という矛盾・相反する感情が人間には存在するが、フロイトがエロスと攻撃性・破壊の本能という二つの本能は死の本能に他ならないとした(『文化の不安』)ことを発展させて、N・O・ブラウンは「攻撃性とは外に向けられた死である」⁽¹⁵⁾と考えることが問題解決の第一歩だと言う。従って現実崩壊を経験し、自己の空間への支配力を失ってゆくレンネ・ベンの攻撃的で加虐的^{サドマシク}な表現はこの死の本能から発すると考えることができる。

「…自己破壊という形をとって内面の自己に向けられる攻撃性は死の本能である。したがってフロイトは、人間の外向的攻撃性（加虐性^{サディズム}）は、『根源的被害性^{ライニグ・マシニウム}』から派生するものとし、この根源的被害性と死の本能を同一視することにより、これを論理的対極として生の本能を補ったのである。⁽¹⁸⁾」

人間の肉体（屍体）に向けられたベンの攻撃・破壊の衝動の表現が根源的被害性＝死の本能から発したものであるとすれば、それは自己に向けられたものでもあることになる。しかも現実崩壊・自我崩壊した自己にとっては外向的攻撃性はまさに生の本能を補うもの、自己救済の方法として機能する。

「フロイトによれば、攻撃性は生の本能と死の本能の融合をあらわしている。それは死の本能が持っている内在的な自己破壊の傾向を外に向けて、死を指向する願望を他者の殺害に代えることによって有機体を救おうとする融合である。」⁽¹⁹⁾

他者の殺害、つまり屍体への攻撃によってベンは自己の何ものかを自我崩壊から救おうとしたのである。我々はこのことを踏まえて『モルグ』においてその救済がどのようになされているか、或いはなされなかったかをさらに見ていこう。

「ニグロの花嫁」も実質的には前の二つの詩と同じ構造をもつ。つまり、ブロンドの白人女の屍体の隣に黒人の屍体が並び、黒人の「汚れた左足の二本の指先を／彼女の小さな白い耳の内部へ／突っ込んでいた」(『Neerbraut』9)という交合、或いは、凌辱のエロスと、人種の相違を巧みに反映させた心理的サディズムによって読者には凌辱されたというイメージが残るこの白人女をベンが初恋の幸福を感じる花嫁に譬えることによって、サディズムに一種のへやるせなさ、即ち、小市民的幸福の虚しさを加え、その種の幸福をサディスティックに破壊する。しかし、このサディズムにはさらに畏が仕掛けられている。つまり、この花嫁の幸福も「メスを彼女の／白い咽喉に沈めるまで」、死の血が飛散するまでしか続かない。こうして死（屍体）はいわば何度も凌辱され、破壊される。それと同時に現実主義的思考に支えられた読者の自我も破壊される。そこに生まれる「へやるせなさ」とはサディズムが読者の内面に不承不承の認知を以って内向化してゆく過程の産物に他ならない。

『モルグ』の最終詩「レクイエム」における宗教的表象もむろん皮肉な意味を持つものであり、実質的にはそれはエロスとサディズムから成り立つ。まず、幾つもの裸の屍体が、キリストの十字架であると同時に男女の交合をも示す「十字」の形に重ね合わせられている。従ってキリスト教的にも生殖的にもそこからは「最後に」子供が生まれてくることになる。詩ではそれは死んだ胎児であるが、それには勿論、神の御子であり、犠牲の小羊、人類の救済者であるキリストが当然、含意されている。

「頭蓋を開き、胸は二つに裂く。子宮は／今やその最後に子供を生む／それぞれの子宮が鉢にまるまる三杯分を生む」つまり脳から卵丸までだ／そして神の御堂と悪魔の厩が／バケツの底で胸に胸を重ね／ゴルゴタの丘と原罪に対してにやりと笑う」

《Requiem》10)

キリスト教性が色濃く現われた詩だが、胎児＝キリストが死んでいることから、ベンにとって救いへの距離は遠いというより、むしろ不可能であることがわかる。予め拒絶され、不可能な救済という点においてこの宗教性は実はまさに反宗教性なのである。新約におけるキリストの死（ゴルゴタの丘）や旧約の原罪に対して「悪魔」が「笑う」とうたわれるのは宗教性（キリスト教）への皮肉な攻撃に他ならない。性^{エロス}という人間の原初的欲望が罪（原罪）となり、やがて人類全体の樂園追放へと結果したこと、しかしまさにその性ゆえに人類が誕生してきたこと、この二重性が解剖学的諸器官の詳細で生々しい描写によって繰り返されながら、生は性に始まり、死に終わる、つまりエロスとタナトスを内包したものであることが示される。こうした思考を背景に直接に出産、或いは、出産の失敗＝死がこの時期には数多くうたわれるが、「ベルリン最下層の女たち／（…）／娼婦、女囚、叩き出された女たち」の性を素材としてとる点においてベンの小市民的、平均人間的、享楽主義的現実への抵抗と嫌悪が表出する。社会的に脱落した女たちが十三人も詰め込まれて陣痛の叫びをあげる「分娩する女たちの部屋」を描いた詩「男と

女が癌病棟を通る」では「癌化した子宮から子供が切り取られ」、別の女は「三個の子宮からのように出血する。」しかし出産した子供は「尿と排便がすりこまれた」「それ」でしかなく、性の結果としての生には誕生と同時に死がすでに随伴している。

「この小さな肉質の塊りを／全てが通過するだろう——つまり苦しみと幸福が／そしてそれはいつか喘鳴と苦悩のうちに死ぬ」

《Mann und Frau geht durch die Krebsbaracke》14)

苦悩のうちに誕生を願いつつ、どうしても死をも見据えてしまうベンは、ついには人工的な生の排除を詩「^{クレンジュ}掻爬」において性Ⅱ交合と重ねる。

「今や女は同じポーズで横たわる／受け入れるのと同じポーズで／鉄の輪を嵌められた／両腿は弛く開かれ。／頭は溶け去り…」

《Curetage》17)

出産・誕生はその始源において一切の白紙化^{タブラ・ラサ}を意味し、失なわれたものの回復Ⅱ再生を含意する。夥しく流れる血は誕生や生を支え、また、生む大地そのものの形象、誕生に伴う苦痛の形象でもある。従って「^{ヤクレイシュ}搔爬」においても胎児の死は確かに訪れるが、しかし地上的な制約を離れ、形而上学的に象徴的に生に繋がり、再生への転化が救いとして願望されるのである。

「私たちの後は野となれ山となれよ／ただおまえだけ、おまえだけが…」(17)

この「おまえ」は死んだ胎児に呼びかけたものであるが、胎児は死によって逆に現世的制約と影響を脱することができる。一九二六年以降の詩にも頻繁に現われるこの「おまえ」についてザールベルクは詩「イースター島」や「陶酔的洪水」を例証として「おまえ」は「内的構造」であり、これが「おまえ」と結びつくとし、ベンの「超越的なおまえ」という表現に注意を向けさせる。⁽¹⁸⁾全ての形象が「出血と凄まじい渴望／真近な崩壊」(二)を求めている状況下での白紙化は、「Nach uns die Sinflut!」⁽¹⁹⁾という言い廻しにおいて Sinfut にキリスト教・旧約的「ノアの洪水」の意味が強く含意されていると考えてよいことを示す。原罪、キリストの死＝十字(架)、鎮魂歌^{レクイエム}という死にまつわる形象は「ノアの洪水」による破壊＝白紙化と新しい生を志向し、現実が崩壊したベンの再生の模索であったのである。

生と性^{ニロ}への攻撃と破壊と見えたものは自我崩壊の危機に瀕したベンの自己救済の試みの表現であった。その際、抱え持った死は心理的、象徴的な死^{タタ}に姿えられ、性・誕生・再生へと逆転されたのである。

(三) (2)の項、終了。以下、続く)

《註》

ゴットフリート・ベンの作品からの引用は、全て Goltfried Benn: Gesamte Werke in acht Bänden. Hrg. von Dieter Wollershoff. Limes Verlag. Wiesbaden 1960 に依り、本文中に引用作品の略号と頁数のみを記した。

また、詩の訳は『ゴットフリート・ベン著作集第3巻 詩・戯曲』(生野幸吉／神品芳夫／小林真／山本尤訳 社会思想社 一九七二年)を参照し、訳を引用した場合は訳者名を記した。また同一の詩からの引用は原則として訳者名、引用頁数を最初の引用箇所のみ付し、引用頁数が変わった場合のみ改めて頁数を明示した。

尚、作品略号は次のとおりである。(括弧内は巻数を示す)

M.: Das moderne Ich (Bd.3)

A.: Der Aufbau der Persönlichkeit (Bd.3)

G.: Gehirne (Bd.5)

E.: Die Eroberung (Bd.5)

Ep.: Epilog und lyrisches Ich (Bd.8)

L.: Lebensweg eines Intellektualisten (Bd.8)

D.: Doppelleben (Bd.8)

また、詩は Bd.1 及び Bd.2 にある。

- (1) Dieter Wellershoff: Gottfried Benn. Phänotyp dieser Stunde. Kiepenheuer & Witsch. Köln 1958, S.100
- (2) Else Buddeberg: Gottfried Benn. J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung. Stuttgart 1961, S.56
- (3) ところで「存在」と「出来事」が対称項であることに注意しておく。ベンによって外的世界内での「存在」は現状を變革しない既製の存在、非生産的、平面的、静止的なものであり、生成的なものである「出来事」とは区別されている。
- (4) 用語に対するベンの定義はいつも曖昧であり、例えばベンは「自我」を意識（或いは意識化した自我）の意味にも、また創造に関わる自我であるが意識化によって失われた本来的自我の意味にも用い、両者は区別されない。これは「精神」という用語に対しても同じで、法則に支配された精神というネガティヴな意味の場合と創造的、構成的精神というポジティヴな意味の場合がある。
- (5) Oskar Sahlberg: Der Dichter als Psychologe. Ichbildung und kreativer Prozeß bei Gottfried Benn. In: Text + Kritik.44 Gottfried Benn. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. edition text + kritik. München 1985, S.23
尚、訳文中の傍点はベンの用語だが「ベン」は額 (die Stirn) を脳髓 (大脳 der Hirn) と同じ意味で用いていると考えよう。
- (6) 肉体はそれが属する社会（階層・小市民性）も内示するため、結局のところ小市民の道德が批判されることになる。ベン は手法的には死が人間の尊厳ある死ではなく腐った肉体の死であることを示すことによって批判を痛烈なものにしている (G. 1187)。
- (7) ニーチェを敬愛するベンにおいてティオオニソスがニーチェを意識していることは勿論だが、「偉大な夜の時間」「自我の頭上は真昼である……」という表現からこの場面における決意はツァラトゥストラと重なる。
- (8) ベンの詩で女性の多くが娼婦であるのは、軍医としての経験、娼婦専門病院に勤務していたこと (E. 1873)、また多くの患者が娼婦であった皮膚病性病の開業医であったことと深く関係する。
- (9) Wilhelm und Elisabeth Gössmann: Vom Geist der deutschen Literatur. 邦訳 W・トスマン、E・トスマン『ドイツ文学の精神』谷口泰、信貴辰喜、福山明治、田子修平訳 アポロン社 一九六〇年 一七一頁
- (10) トスマン 前掲書 一七一頁
- (11) Walter Lennig: Gottfried Benn. Rowohlt Taschenbuch Verlag. Hamburg 1962, S.26
- (12) Walter Lennig: a.a.O., S.26

- (13) Walter Lennig: a.a.O., S.47
- (14) Marie Bonaparte: Chronos, Eros, Thanatos. Presses Universitaires de France, 1952. 邦訳 マリー・ボナパルト『クロノス・エロス・タナトス』佐々木孝次訳 せりか書房 一九六八年 三十頁
- (15) Norman O. Brown: Life against Death. The Psychoanalytical Meaning of History. Wesleyan University 1959. 邦訳 N・O・ブラウン『エロスとタナトス』秋山あゆ子訳 竹内書店 一九七〇年 一〇九頁
- (16) N・O・ブラウン 前掲書 一〇九頁
- (17) N・O・ブラウン 前掲書 一一〇頁
- (18) O. Sahlberg: a.a.O., S.25-26